

心と社会

54巻1号

特集
若者の今

2023

191

日本精神衛生会

『相馬事件：明治の世をゆるがした
精神病問題 その実相と影響』

岡田靖雄 著

クボタ心理福祉研究所 関 百合

相馬事件という明治時代の社会をゆるがした精神医療に関わる一大事件について、不明にも2011年の東日本大震災の後まで筆者は知らなかった。知った経緯も、震災関連のボランティアで東北に赴く精神科医から、(震災当時の)相馬市にはメンタルクリニックがないという話から派生して「そういえば相馬事件というのがあったわね」と聞いてのことだった。この本を手にしたとき、あらためて東京近郊の精神医療しか知らなかった自分の視野の狭さとともに、自分が生きてきた時代の医療体制しか知らない無知を痛感することになった。

「相馬事件」とは明治中期、最後の中村藩藩主相馬家13代で、後の子爵相馬誠胤の精神疾患とそれをめぐる、いわゆるお家騒動である。当時はまだ精神医学の導入期であり、もちろん現代のような精神病薬もなく、また精神病院を含めた精神科医療体制も草創期であった。そんな中で、被害念慮が強く身近な人々に暴力を振るうことも度々ある当主を家令が入院させるが、その入院をお家の財産横領のための謀略と考えた元藩士錦織剛清が入院中の誠胤

を奪還し逃亡する。結局は癡狂院に再入院させられるのだが、その後錦織の訴訟とほどなくして病没した誠胤は実は毒殺されたのではないかという疑惑が起こり、当時の一大スキャンダルとなっていた。

本書は決して読みやすい本ではない。だが中盤まで耐えて読み進めれば、著者岡田靖雄氏がこの複雑な事件を当時の資料をふんだんに織り込み、決して拙速にならず徐々にその全貌を解き明かしていくさまが見えてくる。この件には志賀直哉の祖父や後藤新平、星亨など明治期の歴史に残る人々が脇を固めることも興味をそそられる。そして、この事件が実は海外に知られることにより不平等条約改正問題にも影響を与え精神病者監護法制定のきっかけとなったのではないかと説くところに醍醐味がある、まさしく冒頭で著者がライシャワー事件当時から相馬事件の研究を始めた、と述べていることと呼応する。歴史は繰り返している。今の時代私たちがこの歴史から何を学ぶのか、真剣に問われている。(六花出版、A5判、368頁、定価4,950円[本体4,500円+税10%]、2022年)

『心と社会』次号予告
(No.192 2023)

特集：第37回日本精神保健会議
情報とメンタルヘルス
～SNSの負の側面と適切な利用を考える～

令和5年6月発行予定

心 と 社 会

No. 191 2023

発行

令和5年3月15日

編集発行

公益財団法人 日本精神衛生会

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-1-10

メディカビル3F

電話 03-3518-9524 (FAX 兼用)

郵便振替 00190-4-101094

〈E-mail〉 z-seisin@dc4.so-net.ne.jp

〈Home Page〉 <https://www.jamh.gr.jp>

編集協力：(株)真興社